

## 鹿 児 島 連 歌 史 (一)

野 中 常 雄

Tuneo NONAKA

## (一)

中央においては連歌は応永のころから再び盛んとなり梵燈庵主(朝山師綱)のようなすぐれた人が出た。師綱は応永11年(1404年)將軍義満の使者として薩摩に下っている。師綱の下向が何か薩摩の連歌に影響があつたのではなかろうかと思うが、そういった文献はまだ管見には入らない。

連歌は応仁の大乱中も、またそれ以後においても、ほとんど影響をうけないで行われたといわれている。諸大名も多くは、その家において恒例の連歌を催し、諸国の神社でも恒例の神事として連歌が行われたようである。この頃薩摩では内乱が相ついで起つており、連歌などの催されたような様子は見えない。「<sup>鹿児島県</sup>郷土史大系」(第5巻)には京都連歌の宗匠であつた宗碩法師が種子島に渡り、慈円寺境内の池の坊に止宿したことがあると記している。この時千句の連句を興行し、三日にして終つた。その時の句をあげるとして、下の二句をあげている。

秋や先千種にやらぬ萩の声 宗 碩

野は静かなる露のあけぼの 忠 時

島津種子島忠時が上京の際に相約したものであつたという。忠時は文明17年(1485年)には島津忠昌公(桂庵禅師を招いて薩藩文教の基を開いたというべき人)に従つて、戦功を立てた勇将であるが、かつて京都に遊び和歌及び蹴鞠の道を飛鳥井中納言雅康卿について学び、奥義をきわめて明応6年には免状を賜つたといわれている。忠時は天文5年に69才でなくなつており、宗碩は天文2年に没している。同時代であるから、あるいは渡島したのかも知れない。宗碩は宗祇門下で、宗祇・兼載・宗長・肖柏・実隆・宗碩・宗牧とともに連歌七子とよばれる中にはいつており、当時第一流の連歌師であつた。郷土史大系のこの記事は何によられたか、それが記してないのが残念である。これについては調査をはじめているが、今のところまだ何もわからない。

## (二)

島津家中興の祖といわれる貴久が勝久のゆずりをうけたのは大永6年(1526年)であつた。実久らと戦い、その余党を平定したのは天文年間に入ってからであつた。貴久は文を修め武を練り、領土の統一も、その緒についたのであり、大諸侯たる基を開いたのであるが、このころから薩摩においても連歌も行われたのではなかろうか。天文14年(1545年)川上忠頼筆写の「連歌新式」が鹿児島にのこっていることは、そのころから連歌が行われたことを示していると見ていい。

この「連歌新式」は川上家に伝えられたものを同家第15代の川上久良氏より鹿児島県立図書館に寄贈せられたものである。本書は昭和6年5月、古典保存会から複製出版された。「連歌新式」は連歌をつくる場合の規則を述べたものである。文中元年(1372年)に、二條良基が救済法師と相談し

て定めたものである。その後、世の変遷につれて享徳元年(1452年)に、一條兼良がこれに<sup>こんあん</sup>今案を加えた。さらに文龜9年(1501年)に牡丹花肖柏が整理したものである。のちまた里村紹巴が多少取捨したと伝えられている。

「連歌新式」の複製本の解説の中で山田孝雄氏は「本書はこの時の実物たること 一点の疑を容る余地なし」といい切り、天文14年忠頼の書写にまちがいのないことをいつておられる。なお、また今世間に伝わっているものは、専ら紹巴の手を経たものとどまり、それ以前の真面目は容易にうかがうことは出来なかつたが、本書が出て、はじめて紹巴以前の形式がどんなものであつたかを、たしかめ得ることができた。本書には脱漏と認むべきところもいくらかあるが、肖柏本の真面目は本書によつてうかがわれる。肖柏がへんさんしてから45年後には書写したものである。要するに本書は現在知られている「連歌新式」の写本の中で、正確に年代の知られて、しかも最も古いもので連歌史研究の上において、すこぶる貴重すべき書である。今、本書を発見して、ひろく世に紹介することを得たのは学界のために喜ぶべきことであると結んでおられる。こういう本が筆写せられていることは、当時あるいは、それ以前から鹿児島でも連歌が行われていたことを示すものであろう。

「川上忠塞一流家譜」によると、元祖忠塞は寛正ないし永正年間の人である。その子栄久を二代とし、栄久には道堯という子があつたが代をつかず、道堯の子忠克を三代とした。忠克の子に忠頼・久朗があつた。家譜卷之五に、忠頼・久朗の事を記している。忠頼は通称を虎徳、源三郎とし「19才死<sup>年</sup>」とある。また「是より先、天文8年、実久の勢漸く減<sup>原文のまゝ</sup>ぶ。玆に因て我が家も亦危きこと、宛も風燈の如し。此の時に当つて、慈父忠克勝敗の幾を窺ひ得て、伯父信濃守忠興と俱に評議を凝らし、而して番に申木野を貴久公に献するのみに非ず、忠頼をして旗下に属せしむ。以ての故に、当家無事、今日に至る矣。貴久公守護<sup>た</sup>為るの後、忠頼をして谷山本城の主宰為らしむ、且中村を賜ふ者也」(原漢文)とある。また弟久朗の記事には「天文五丙申年誕生」「兄忠頼早世に依つて、家督を継ぐ」「天文22年、太守義久主久朗に命じて家老職に任ぜんと欲す、この時久朗18才也…」等の記事があるから、兄忠頼の時代と人物とを察することができる。忠頼の「連歌新式」の字は実になりつばである。わずか19才で早世し、連歌も一句も見当らないのが残念である。なお忠頼筆「連歌新式」は家譜の卷之六に影写を載録している。この影写はすこぶる忠実なものである。

「川上忠塞一流家譜」卷之五には、「日新公貴久公及び歳久らの連歌一道、祖先久朗その中に列る。故に臨<sup>りんぱ</sup>摹して後に開く」として連歌をあげている。それを示してみよう。

#### 何 草

山さくらあらぬこすゑの雲もなく	日 新
か す ミ に か か る 月 ハ 曙	久 秀
江を遠みかへる鴈がね啼捨て	久 朗
ひとりかもめの閑かなるかけ	貴 久
袖さむく嵐吹立ゆふ暮に	年 久
やどりやいづこ道のはるけさ	季 久

誰にかも旅の行手の言とへん	書 信
つかるる駒をしばしやすめよ	釣 江
枯のこる秋の草葉のむらむらに	友 見
うつるほとなき野辺の露霜	綱 宣
有明の月向後はかすかにて	能 賢
いく寢覚にか夢はたとりて	重 和
つれもなき中とハしるもたのむらん	重 秀
とけん心をまちてこそ見め	喜 庵
浅からす氷とちたる山の井に	親 豊
たへてや住ししばのかりいほ	経 久
世のうきをおもひとちつつ出ぬらん	房 信
さそひし友そをくれ行道	社 堯
雲かぜに翹とかれてとぶからす	盛 房
す〇野もたてる松のさびしさ	宗 道
花かとや袖の宮々打むれて	貴 久
春にあへるやたのしみにせむ	年 久
ましはりて霞をくめる老が身に	久 秀
うれしきことの涙もろなり	書 信
つつまれぬおもひはよそに見はつべし	季 久
しのび行には螢もぞうき	友 見
更はてて誰かにくるまの音ならん	釣 江
ともにや月もすめるふゑ竹	重 和
いにしへの秋をこころの故宮に	綱 宣
苔むす松のしづく露けし	能 賢
たのむかた人もあらしの山のおく	喜 庵
よわるたけては何か友なる	房 信
ミとり子のまなびの道をゆるすなよ	重 秀
おもふをそむく中へはかなし	親 豊

以上34句だけ見えている。この連歌の年代ははつきりしないが、発句の作者日新公は貴久公の父君であり、「いにしへの道をきいてもとなへてもわが行ひにせずばかひなし」をはじめとする「いろは歌」の作者として名高い人である。永祿11年(1568年)に没しておられる。第三の作者久朗も、この年33才で戦死している。これらから察するとだいたいの見当はつくようである。一句の人が6人、二句の人が14人合せて20人の人の名が見える。相当行われるようになっていたものと思われる。

久朗が戦死した年のお盆には、貴久公は久辰(久朗の子息)の宅においでになつて、

とげし名よ入りての後も秋の月

という発句を手向けておられる。また家譜卷之五には「久朗・正信繁と両吟、三十六句の連歌あり

りんぼ  
臨摹して左に開く」として

暮と明と桜にわかん色もなし	久 朗
月ハかすめるかりふしの山	正 信
行春を鴈も余波や思ふらん	
こゑなきかはす軒のうくひす	久 朗
独居のつれづれ過る櫺の戸に	
玉ゆらなびく露のをすすき	
心して吹かぬや今朝の秋の風	同
よすりに船を出すはつしほ	
思ふとち友なふ旅ハ旅ならで	正 信
かたりすさむに日をそ送れる	
まなひにほうとみて何か頼ままし	
すむにやすかる○世ならめや	
ひたすらに深くむすびし柴の庵	
道もまで草しげるかげ	
とはぬをもよしや○○ぬ五月雨に	同
つてなつかしみ思ふたそがれ	
一筆にこぼれにけりな我涕	
捨てても得やハをかんかた見そ	久 朗
散花の道をししたふ嶺の雲	
むつましけにも山そかすめる	正 信
雪ははや消ものこらぬ明ぼのに	
月落かかる軒ぞさびしき	
水○さかり田の原の秋更て	久 朗
鳴たつ沢のややさむき空	
音つるる風に柳の散もおし	
なれしにもにぬ庭の浅茅生	
君待と夕べいつのむかし <small>××</small> え <small>××</small> て	久 朗
あたことの葉にうつろふもうし <small>かはか</small>	
すく成をおもへ心の一すぢに <small>とまらすハか</small>	
偽のやハ神にあり <small>なん</small> べきか	正 信

おろそかの事へ我かたもかへりみよ  
 袖のやつれに花もはつかし 同  
 ささかたや春にもいかでなくさまん  
 ○ ○ し く 浦 の タ か せ  
 もれ出る月へ○まに影ろひて  
 時雨はさくの秋をもよほす

をあげている。

忠頼、久朗の父である忠克（意釣と号す）のことは家譜の巻の三・四の中に見えている。86才で没したが、没年はわかっていない。しかし、「上井覚兼日記」にも意釣の名は見え、日記の天正2年（1574年）10月11日の条には、「此日意釣にて夢想連歌候、其連衆にて候也」と出ている。2人の子供忠頼久朗より生きながらえたこともわかるが、連歌をたしなんだことも知られる。2人の子供も父意釣の影響によつて連歌をやるようになったのかも知れない。

「覚兼心得書」を見ると、「先17才ばかりのころ近衛殿御使として進藤左エ門太夫殿長治御下向の時、正月12日御千句御座に被召出、さてはこれも稽古なくては叶はじと珠玄・珠長などへ物語草紙などの外題をもたつね、上句下句などの字数をおぼえ、京都不断光院義溪鹿児島へ御滞在の条、彼吟窓下に、時々致勤忍、連歌の法粗得尊意…」とある。17才の時というのは、「覚兼日記」12年正月1日の条に

齡四十を祝して

春のくる道もまどへぬ今年か那

とあるのから推すと、永祿4年（1562年）にあたる。

鹿児島においては、連歌は中興の英主とよばれる貴久公の大永年中には相当行われるようになっており、享祿を経て天文に至ると相当盛んになつたと見えて、「連歌新式」の写本ものこっているのである。そして永祿のころには相当さかんにおこなわれたようである。

### （三）

「川上忠塞一流家譜」巻之七には、川上家五代久辰のことを記している。久辰は10才で父久朗に死別したが、太守義久は久辰を忠臣の子として愛した。15才ではじめて出陣し、文祿の役には朝鮮に渡つて戦つた。のち志布志の地頭職は、その子久国にゆずり、意船斎と号し、寛永5年（1628年）70才で没した。同書には「川上意船斎代、連歌一卷、意船斎の自筆か、予が家に久しく納る所なり、写して後に開く」として次の連歌を出している。

春雨にうくひす伝ふ花の枝	
露に色そふ釣○○○の山	意 船
あかなくも今朝まで月に圓るして	彌 阿
夜寒おぼえず語る伴ひ	但 阿

更行を鐘のひびきや知すらん	休	也
こころにいそく旅の衣手	重	興
よに日をもえらびて出る船の上	重	行
風しつかにもわたり海ばら	昌	信
白 <sup>ゆふ</sup> 雨 <sup>だち</sup> は見るが内よりふり通り	兼	慰
あつさわするる木々の下道	正	順
時鳥声はいつくのかたならん	則	正
暮をもよほす山々の雲	重	辰
梯のおくはけぶれり栖にて	重	昭
水のゆく衛のつづく末々	釣	雪
流れをやもとめて月の照すらん	意	船
をとつれきぬる秋の初かせ	彌	阿
折なびく竹の葉分ハ露もなし	但	阿
行かひしげき玉銚の道	休	也
たたしくもけふのまつりの暮かけて	重	興
たてならべたる駒ぞいさめる	重	行
武士のたけき心や見えぬら舞	昌	信
いひかはしをくことは忘れじ	兼	慰
よひよひにとハぬうらみをたえかねて	正	順
しのぶ軒ばのささがにの糸	則	正
風やただ吹すさびたる道ならん	重	辰
山は木の葉のしぐれするめり	重	昭
かりそめの篠の宿りハ寒けくて	釣	雪
むすぶまぐらの暮は物うき	執	筆
思ひ出○都の <sup>つ</sup> 伝は聞まほし	彌	阿
いつかへりこん天津かりが音	但	阿
折からと鳥々はいま囀りて	休	也
野は下もえにつづく	重	興
かたはらの里乃住るに馴やせん	重	行
月を友としをくる明くれ	重	辰
身にしめて風を○○○○○○○○	重	昭
○の音さへ○にこもれる	昌	信
真 <sup>ウ</sup> 砂地の末やはるかに見えぬらん	則	正
日もをちかたといそぐ思を	釣	雪

草 かりの袖は〇〇に打つれて	兼 慰
竹 より お く に 籠 る 村 々	正 順
世 の 外 に 住 や か し こ き 人 な ら ん	但 阿
時 の よ し あ し 心 に そ し る	彌 阿
室 の 戸 は お こ た り も な き お こ な ひ に	重 興
月 に も か く る か け の と も し 火	休 也
釣 舟 は 明 る 〇 間 に た だ よ ひ て	重 辰
見 る 見 る も た だ 〇 つ る 袖 し ほ	重 行
さ が し き や 岩 根 伝 ひ の 道 ほ そ み	昌 信
間 く る 人 も 稀 に こ そ あ れ	重 昭
咲 こ ろ の 花 の 色 香 も と き す ぎ て	正 順
う す す み た る 山 の 遠 近	則 正
寒 帰 る 深 谷 は 風 や 音 す ら ん	彌 阿
を そ き ひ か り に 春 ぞ し ら る る	但 阿
半 〇 ハ 長 閑 に 処 れ る 朝 ぼ ら け	重 行

63句、13人の名が見えるが、もつとあつたのを略したものであろう。久辰のことは「上井覚兼日記」にも天正3年3月13日の条をはじめとし、十余ヶ所出ている。天正11年3月25日の条に「御月次連歌也、御座体、主居左衛門督殿・珠長・拙者・伊集院野州、客居上川上殿・釣江…」とある。この川上殿というのはその前日24日の条に、「川左将」とある、左近将監久辰のことである。久辰25才の時のことである。天正13年5月9日の殿中における若衆中の御稽古連歌にも見えている。

#### (四)

川上家の六代は久国である。朝鮮役にも従軍し、寛永7年(50才)御家老職に任ぜられた。慶安2年(69才)に致仕し、寛文3年、83才で没した。和歌もよくしたが、家譜巻之八には「寛永14年霜月9日、賦朝何連歌百韻、川上因幡久国連衆に列る。故に臨写して後鑑に備ふ」として

寛 永 十 四 才 霜 月 九 日

#### 賦 朝 何 連 歌

千 代 ふ る や 霜 の 花 咲 庭 乃 松	宗 順
さ され 岩 ほ の 月 さ む き く れ	久 国
山 風 の は ら ぬ 雲 間 に 滝 落 て	久 賀
舟 さ し く た す す ゑ の 川 浪	忠 政
雨 は る る か け の 村 竹 な ひ き 合	久 加
こ ぼ れ て す す し 露 の 草 々	重 国
ほ た る 飛 夜 は 更 る ま で 端 居 し て	元 綱

あく期もあらぬ友のかたらひ	重	位
旅 <sup>レ</sup> たつをしたふ名残りのいかのぼり	惟	清
またき朝戸に鐘ひびき来ぬ	兼	昭
杉間よりもれし薨のかけ高み	吉	綱
紅葉色こくなる○○ところ	円	楽
露時雨をととして更る秋さひし	久	国
風すさましくねざめしてけり	宗	順
よもすがら月に牡鹿の啼出でて	忠	政
舟ハ明石に <sup>つな</sup> 維きとめぬる	久	賀
夕しほや満くるよりも早からし	重	国
葦屋のあたり道かすかなり	久	加
霜はたた田つらのつつき置そひて	重	位
日のさすかたに眠るむらとり	元	綱
人はいさ知らぬはやしの花の枝	兼	昭
梅が香をくるかぜのたびたび	惟	清
春の夜の間に○よりあやなけれ	宗	順
ゆるさぬ契したふ手枕	吉	綱
又いつのあふせならましかれ妻	久	賀
とりかはしぬる袖のさかづき	久	国
道遠みかへるさになる小鷹がり	元	綱
野は秋風の吹きまよふ也	忠	政
見る見るも外面の霧のたち消て	久	加
もれてさやけき山まとの月	重	国
かたへより梧の木の葉の散つもり	惟	清
こむといひしをまつ間久しき	重	位
かくばかり誰かさけぬる中ならし	兼	昭
みとりの袖のなみだ干がたき	宗	順
位にし昇りかねたる新まいり	久	国
みるに御階のあたりはるけし	元	綱
た <sup>ミ</sup> たへ置砌の池の水ひろミ	忠	政
里のめぐりにかこひそへたる	宗	順
折とるをあるじのいとふ花のかけ	忠	政
ねたる胡蝶ハあはれならずや	重	位
目の色ハかすめる露にほのめきて	兼	昭



み ぞ れ し 跡 の 雲 消 ぬ め り	元 綱
山 が つ の し ば し た く 火 の 細 け れ や	惟 清
鹿 の 子 の 臥 そ と め や た く ら 舞	吉 綱
道 さ へ も 見 え ぬ 広 野 の 高 萱 に	宗 順
す ミ か へ け り な 秋 の ふ る 郷	忠 政
い さ ら 井 の か け ひ 屋	久 加
か り 田 の 面 の 月 の さ び し さ	重 位
あ さ り す る 方 に 鳴 よ る 天 つ 鴈	久 国
朝 霜 ふ か し 真 砂 地 の 末	重 国
行 か よ ふ 袖 も 冴 ぬ る 松 の か け	久 賀
お こ な ひ し け き 寺 の ○ し 入	宗 順
す へ ら き の 世 を お も ふ こ そ 浅 か ら ね	重 位
そ こ に 御 ○ の か す に そ ひ ぬ る	惟 清
立 <sup>ミノウ</sup> を く や 爰 に か し こ に 馬 車	元 綱
神 の ま つ り の 時 を ○ ○ ○	兼 昭
た ち ぬ べ き 色 も こ と な る ○ に て	忠 政

(中略 25句)

立 <sup>ミノウ</sup> な ら ぶ 茂 り の 下 草 裏 枯 て	惟 清
袖 あ ま た な る 生 田 野 の 道	兼 昭
は る は る と 吹 た わ み た る 山 お ろ し	忠 政
里 の し る べ の ほ か け 見 え つ つ	久 国
く る る よ り 旅 の や ど り を も と め	宗 順
つ か れ し ま ま に 馬 草 飼 な り	久 加
ち れ ば 咲 花 の 詠 に あ く が れ て	元 綱
な が き 日 く ら し 袖 の か た ら ひ	重 位

宗順13, 元綱10, 久国9, 重位11, 久賀, 惟清9, 忠政9, 兼昭8, 久加9, 吉綱7, 円楽1となつている。考察しなければならない点も多いが, 川上家の連歌については一応ここで終ることにする。

次に「上井覚兼日記」を中心として, 天正以後の連歌について書く予定であるが, 紙数の関係でひとまずここで終ることにする。